

## 1.3 実在的世界記述と言語的世界記述

二元論的観念論の系譜：

【プラトン】 → 【デカルト】 → … → 【カント】 → 【量子言語】

の中で、科学的に成功したのは量子言語だけである。そこで、次の問い掛け：

(A) 同じ二元論的観念論なのに、「カントまでの世界記述」と「量子言語の世界記述」との本質的な相違点は何か？

に答えることが急務になる。結論的には、空想的言語的世界記述と科学的言語的世界記述の違いであるが、これを以下で説明し、次節 (1.4 節) で「量子言語からの帰結」を述べるための準備とする。

### 1.3.1 世界記述主義

世界記述主義とは、

世界記述からスタートするという精神

である。すなわち、

#### (B): 世界記述主義

世界記述主義とは、

(B)  $\begin{array}{ccc} \text{世界はこうである} & & \text{こうなる} \\ \boxed{\text{世界記述}} & \xrightarrow{\text{だから}} & \boxed{\text{諸議論 (計算・論理等)・諸性質}} \\ \text{前提} & & \text{各論 (or, 本論)} \end{array}$

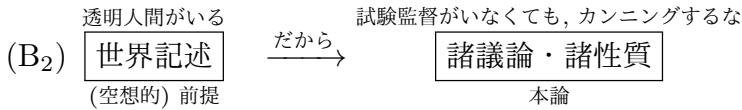
つまり、「世界記述から始めよ」という精神である。

(注) これは、「計算・論理より世界記述の方が偉い」と主張しているわけで、当たり前のことではない (cf. 2.4.1 節 [ゼノンのパラドクス], 4.3 節 [アリストテレスの三段論法] 等)。本書では、繰り返し議論することであるが、哲学的考察が袋小路に陥る多くの場合に、この世界記述主義の無視がある。

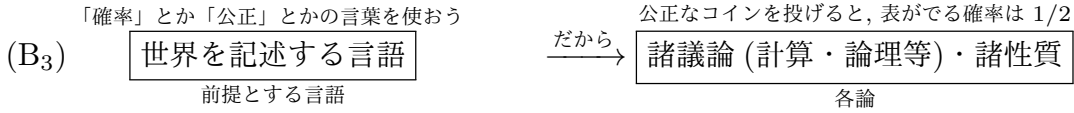
たとえば、

(B<sub>1</sub>)  $\begin{array}{ccc} \text{世界はニュートン力学にしたがう} & & \text{地動説が正しい} \\ \boxed{\text{世界記述}} & \xrightarrow{\text{だから}} & \boxed{\text{諸議論 (計算・論理等)・諸性質}} \\ \text{前提・法則} & & \text{各論} \end{array}$

とか



とか



等である。以下にこれらを個々に説明する。

### 1.3.2 実在的世界記述と (空想的, 科学的) 言語的世界記述

世界記述とは、世界を説明 (理解・記述) することであるが、実在的世界記述 (「世界が先, 言葉が後」の精神) と言語的世界記述 (「言葉が先, 世界が後」の精神) との二種類 (細かく言うと三種類) あると考える。すなわち,

(C<sub>1</sub>) (≈ (B<sub>1</sub>)): 実在的世界記述 (「世界が先, 言葉が後」の実在的精神)

世界が先あって、それを記述する言語を作り、世界を説明する

(C<sub>2</sub>) (≈ (B<sub>2</sub>)): 空想的言語的世界記述 (「言葉 (とか, 観念) が先, 世界が後」の観念論的精神 (= 形而上学的精神)):

世界を語る物語を初めに作っておいて、その世界を理解・記述する。

(C<sub>3</sub>) (≈ (B<sub>3</sub>)): 科学的言語的世界記述 (「言葉 (とか, 観念) が先, 世界が後」の観念論的精神 (= 形而上学的精神)):

世界を語る言語を初めに作っておいて、その世界をその言語で理解・記述する。

具体的にはこれらは次の例にそれぞれ対応する:

(D<sub>1</sub>) (≈ (C<sub>1</sub>)): 実在的世界記述法 (ニュートン力学等の物理学)

(D<sub>2</sub>) (≈ (C<sub>2</sub>)): 空想的言語的世界記述法 (西洋哲学の本流)

(プラトン, デカルト, カント等)

(D<sub>3</sub>) (≈ (C<sub>3</sub>)): 科学的言語的世界記述法

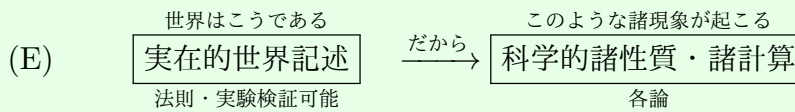
(例えば, 統計学, 量子言語)

以下に、三つの世界記述 – 実在的世界記述と (空想的, 科学的) 言語的世界記述 – について、順番に説明して行こう。

### 1.3.3 実在的世界記述法 (物理学)

**(E): 実在的世界記述法 (物理学)**

さて, 実在的世界記述法



となる, 当然,

(E<sub>1</sub>) 【世界はこうなっている】は真理・法則で実験・検証可能,

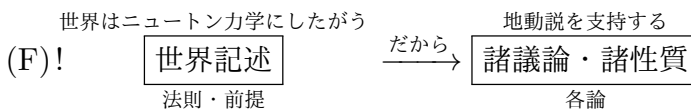
(E<sub>2</sub>) 【このような諸現象が起こる】は各論である

となる.

実在的世界記述法としては, 説明するよりも, 例として

ニュートン力学, 電磁気学, 相対性理論,

等の物理学をイメージすればよいだろう. たとえば,



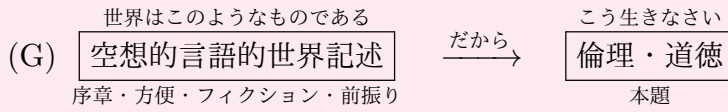
である. 100 年後の日食を秒単位で予言できるのだから, ニュートン力学という実在的世界記述法の威力に驚嘆しない者はいないだろう.

**1.3.4 空想的言語的世界記述法 (西洋哲学の本流)**

次の空想的言語的世界記述法が, 本書のメインテーマである :

**(G): 空想的言語的世界記述法 (西洋哲学の本流)**

さて、空想的言語的世界記述法 (=プラトン流の哲学の語り方) は



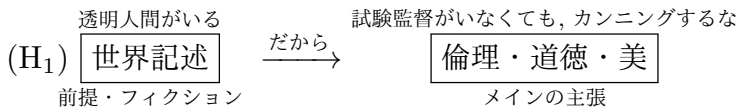
となる。当然、

(G<sub>1</sub>) 【世界はこのようなものである】は二の次 (方便) で、

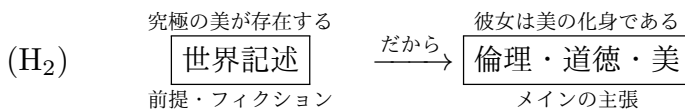
(G<sub>2</sub>) 【こう生きるべき】がメインの主張

となる。

単純に言うと、



とか



と思えばよい。空想的言語的世界記述法 (=空想的観念論) は、西洋哲学の本流を形成する。本書で述べる具体例としては、

プラトン, スコラ哲学, デカルト, ライプニッツ, ロック,  
ヒューム, カント, フッサール

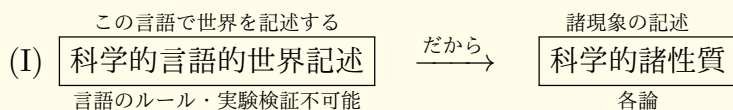
等をイメージすればよい。

////

1.3.5 科学的言語的世界記述法 (統計学・量子言語)

**(I): 科学的言語的世界記述法 (統計学・量子言語)**

さて, 科学的言語的世界記述法とは,



とすると, 当然,

(I<sub>1</sub>) 【この言語で世界を記述する】と言語体系を宣言して,

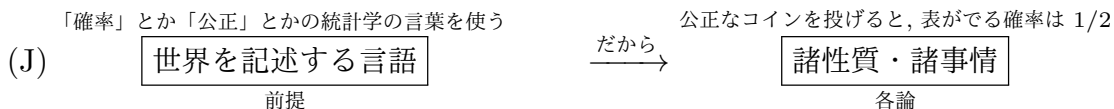
(I<sub>2</sub>) その言語体系の下に【諸現象の記述】をする

となる.

本書の立場では「量子言語」が典型的な例であるが, 一般に知られている例として,

統計学 (=動的システム理論)

をイメージすればよい. たとえば, 経済学とは, 経済現象という世界を統計学という言葉で記述・説明する学問である. また, 心理学とは, 心理現象という世界を統計学という言葉で記述・説明する学問である. たとえば,



である.

////

♠ 注釈 1.5. たとえば,

(#<sub>1</sub>) 世界が存在しなければ, 相対性理論は存在しない

ことは確実で, 相対性理論は (実在的) 世界記述法の一つである. しかし,

(#<sub>2</sub>) 数学は世界と (世界とは無関係なので) 断絶した言語体系である. たとえば, 極端な話, 「世界が存在しなくても, 数学は存在する」かもしれないからである.

したがって, 数学 (ほとんど同じ意味で, 数理論理学) は, 最も確固たる言語体系を構成するが, 本講では, 西洋哲学の本流として,



を考えるが、これらにおいて数学が必須であるということはまったくない。もちろん、哲学を広義にとらえて、

- **論理学は哲学の一種で、ゲーデルは自分らの仲間だ**  
と言うかもしれないが、数理論理学が哲学の一分野だとしても、すくなくとも、哲学の本流ではない。本書では、西洋哲学の本流にしか関わらない。